

いよ／＼龜千代君が家督といふことになつたので、其年の九月に柳營から目附役の津田平左衛門、柘植平右衛門といふ兩人が仙臺に乗り込んで往つて、伊達家の老臣を集めて、龜千代幼少にして家督仰付られたるについては、一門家老を始め物頭番頭以下役々家中一統、別して神妙に相心得將軍家の御大法を守り皆々睦み親しみて當主の成長を相待候様と諭した。是れは大名の當主が幼年の砌にはいつも此例の通りにされたものであつて、龜千代の元服までは毎年斯様に柳營から目附を遣はされたものである。扱これで先一段落ついたが、併し是から藩の中の黨派争ひが段々烈くなり兵部少輔の威權も強くなつて來た。前にも話した通り老臣の茂庭周防定元と云ふものは兵部少輔に知行を増すと云ふ沙汰のあつた時に加増の方に賛成しなかつたと云ふ怨のあるので、兵部少輔が後見になると直に茂庭の役を罷めさせて奥山大學の知行を増した。これは大學は八千石増加しても差支ないと云つたからである。是れが兵部少輔が愛憎に因つて人を貶した始めであると云はれて居る。しかし奥山大學と云ふものも中々の男であつたから、知行を増れたからとて黙つて兵部少輔の我儘を通して置くやうな事はなかつたらしい。一體奥山大學の家は知行三千六百石をもらつて居るから代々家老の職にあつてよい家柄である。そして人柄と云へば随分のやかまし屋で、人が右と云へば左といつて容易にうんと承知しない。斯様に誰の説でも難をつけ、反對に立つ人をばさんざ意地目め代りに、懷いて頭を下げて來る者をば又馬鹿に可愛がる。事にあたつてはどし／＼獨斷専行する程の來力のあるばかりでなく、人を批評する深酷な眼をもつて居て、人のする事の穴がすぐ眼に着く男であつたから、何うしても人に悪くも云はれ

一 目附 幕府及び諸藩に於ける職名。諸事に關して非行を監察する役。

二 物頭 武頭に同じ。足輕大將を云ふ。

三 番頭 番を編成して宿直警護に當る番衆の長。

四 來力 馬力、行動力の意味か？

る方である。しかし決して陰險な所はない。善にもせよ悪にもせよ木地のまゝ丸出しにして少しも隠さないといふ面白い所があつた。全く鼻張りの強い男で大身一門に對しても決して屈しない。それで頑固な男かといへば然うでもなくて酒も飲めば女も好きで、碁、將棋、茶、花なんでも御座れといふ多藝の洒落ものであつた。其のしんじゅつを尋ねれば當人に於ては始終眞直な事をした積りである。決して悪人ではなかつた。常に白無垢の衣服を着、豪華な風をなし、大威張りに威張つて居る。彼は悪いことをしたにしても、こつそり甘い汁を吸ふといふ方ではない。悪い事をするならば男らしくする様の氣象であつた。大學がまだ若い時分の事であつたが、古内主膳が家老の時何かの裁判事件があつて、奥山が評定役の一人として役所へ出て古内と同席したことがある。すると町奉行が訴訟の關係人に向つて、今日は奥山大學殿が評定役の一人として御捌きになるかと云つた。すると大學は威丈高になつて、拙者はそなたの指圖によつて職を執るものでない、餘計な挨拶は無用でござると云つて、それから何をぐづぐづしてゐると云はん計りの調子でどし／＼一人で捌きをつけて古内の意見と違つた裁判をしてしまつた。流石の古内主膳も此様子を見て呆氣にとられたが、翌日殿の忠宗に奥山のやうな才氣のすぐれた若者の出たのは誠に御家のために賀すべきこととござると稱讚した。殿も其後奥山を召出して、其方はなか／＼遣り手であるさうだな、先日評定役として込み入つた事件を取扱つた様子、流石の古内も感心したと我等に話したと云つたので、奥山も頭を搔いて恐れ入つたといふことがある。此話によつて奥山の人となりも分るし、又古内といふ人の雅量のあつたえらい所もわかる。元來奥山大學は斯ういふ風の人であつたから、兵部少輔が如何に威勢があつてもなか／＼其言ふがまゝにならなかつた。それは次の話で分る。當時の大名支藩といふものには二通りあつて、全く本家の指圖をうけぬ様に獨立

五 鼻張り 鼻つばしら。

六 評定役 仙臺藩における司法に關する最高職で、政策決定に關與する。

したる別家と、又さうでない別家とがある。兵部や田村の家は當然後の種類に屬すべきものであつて、伊達の本家とは全く無關係の獨立した大名であると云つた態度で居てはならない話である。尤も獨立自由は人性の要求であるから、大名になつた以上は何事も他の大名並に遣つて見たいといふことは人情の常である故、左様な振舞があつたからと云つてあながち兵部少輔が悪いとも、田村右京亮が悪いとも云へないけれども、然しながらそれでは實際伊達家では困るといふのが伊達家の家臣の二藩に對する不平であつた。たとへば街道に立てる高札の名の如きでも別家の方では自分の家老の名で出すやうになつた。さういふ處からして本家の領分のものが別家の領分へ這入ると、恰度他國の人みたやうな扱ひをうけることになつた。これでは仙臺の家中のもの、面白くないことは勿論で、それが不平の一箇條であつた。それからその時代には領内人返しといふことは随分八ヶましい問題であつた。此人返しといふのは、今日でいふ犯罪人の引渡しである。今日でも他國に逃亡した犯罪人はこれを引渡すことを請求し得るのが原則には相違ないが、其人が政治上の犯人であるならば、之れを引渡さないことになつてゐる。昔でも追手が他領内にその罪人を追跡して往つても、他領の領主に於ては充分に其犯人の罪状を取調べた上でなくては返すとも返さないとも定めなかつたのである。而るに仙臺の別家の方では領内人返しを取調べを自分の方でやるやうになつた。寛文二年の春、田村家の領内の柴田郡槻木町へ最上の罪人が逃げて來た。これは最上領の境目にある仙臺本藩の笹屋の横目付伊藤十内の監視を脱して遁げて來たのである。處が最上の方から十人ばかりの役人が來て其犯人を捕へて歸つて、そして禮狀を田村家へよこした。田村の方でもそれに對し、此のやうなことは將來とても度々ある筈なれば御互に心やすう宜しく願ひたいといふ返事をした。この事が仙臺に聞えると、斯う云ふ大切な問題

七 横目付 將士の行動の監察や論功行賞などを司る職名。

は本藩で決すべきであるのに、田村家で勝手に人返しをしたのは此方を蔑にした譯で、伊達家の體面を毀損したものであるといふので、大層六しい騒ぎとなつて、遂に責任の持つてゆきどころがなく、笹屋の横目付が悪いといふ事に極つて、伊藤十内が責任を背負はされて身代を取上げ放逐されたことがあつた。

それから又當時に切支丹邪宗門禁制につき村々より宗門改めの書付を出す、それを藩ではまともに幕府の奉行所へ出すことがあつた。それを別家の方では仙臺に廻さないで自分の方で直ぐやつた。これも伊達家にとりて不平の一つであつた。次に昔から奥州では初鯉初鴈などを將軍に献上するのが例であつて、本藩の方でして來たのを是れも支藩で別に献上することにした。これも伊達家では不平の一つであつた。斯う云ふ風で伊達家の家中では兵部少輔や田村右京の仕打に對して種々様々の不平があつて随分陰口を云ふものはあつたけれど、兎に角御後見役のすることだからといふので、みんな黙つて誰も表向に抗論するものはなかつた。然るに唯奥山大學一人のみは、これに黙従すべきで無い、彼様なことは何うしていつまでも黙つて見て居られるものか、おれは責任を以て伺ひ立てるといふので江戸へ出た。其時他の家老などの中には私も一所に出ませうといつたものもあるが、いやあなたはおよしなさい、事がもし遣り損ひになると後が困る、やり損つた場合にはおれだけ坊主になればよい、あなた達が混ざると自然老臣一同後見職に反對したと云ふので、兩後見と折合が悪くなるやうで面白くないと云つて一人で出掛けたのである。そして第一番に立花左近將監に説いてみた。すると立花左近は成程尤もでござる、拙者もさう思ふと賛成した。そこで二人で酒井雅樂頭に申し込んだ。雅樂頭も全くさうである、自分も兼てさう考へて居たから、先達でも兵部少輔から初鴈を献上した際に、これは折角だが從來の様に本藩

八 宗門改め キリシタン禁制を徹底すべく、
民衆の信仰する宗教を調査する制度。

から差出した方が宜しいだらうと言ひつけて置いた、又鶴を献上した時も、大藩からでなくて鶴などは献上するものでないと申した位であると答へた程であると、快く其説を受入れたので奥山の伺ひ立てた意見は悉く其通りになつたのである。此の様に奥山大學は時としては後見職の兵部少輔や田村右京亮をもひどく凹こぼまして、甚だ間のわるい目に逢あはしたこともあつた。さうして當時は茂庭周防は既に奥山に蹴落けおされて退隱たいいんしてしまつたし、評定役の原田甲斐は茂庭黨なうであつたが、兵部少輔も原田の如きは役に立つ人物でないとおほいおほいと大に下墨さすんで居た時分であるから奥山に對抗すべき人物はなく、奥山一人は恰あながも全權の姿で大に勢おほいを振ふるつたらしい。随したがつて敵も固より多く出來た。原田なども陰ひそかに奥山の悪口を利き、茂庭も隱居して後も、田村右京亮を煽動おだて、奥山を抑おさへようとした。尤も奥山は前にも云つた通り、きかぬ氣の男で我儘がうもあり悪いこともあつたらう、兵部少輔の言ふことなども碌ろくに聽いてゐなかつた。併しかし彼も一個の狼であつたから却かへつて兵部少輔のやうな狼にも尾を巻かせて居つたのだ。かくて兎に角奥山大學の居た間は、後見職から老臣の政事に餘り多く嘴くちばしを容ゆるれると云ふことはなかつた。しかし此奥山と云ふものも勿論狼には相違ないので、殿は幼稚であるし、誰も頭の抑へ手がないから、悪い政治もあつたに相違ない。然るに伊達家の家來には大身たいしんが多いから、隙ひまに居て政治の悪口を云ふものも多い。一口にいへば色々の黨派が出來て、其黨派が互に難癖なんせきの言ひ合ひをやつたのである。されば奥山は悪人だと云ふも善人だといふも、今より考へれば實はどちらが善いのやら悪いのやら分らぬ。兎に角ごくして居た。

我輩は或時水戸に往いつて水戸の黨派の争ひの事を調べたことが有つたが、其時水戸の人の言ふのに、全體水戸の黨派と云ふものは久しいものであつて、其始めは水戸の先祖の威侯あきこう（徳川頼

房)が水戸城に來られたとき、關東の名家の子孫を大分被官にしたことがある。其れが言はゞ昔の關東大名を寄せ集めたやうなものであるから、銘々家柄を誇る氣味があつて何うも家中が和熟しなかつた、其弊害が今まで残つて居て黨派の争ひになつたと話した。成程聽いて見ればそんな事情が有つたかも知れない。それから米澤の上杉家の話をきいて見るに、これも昔から家中に黨派があつた。一つは長尾家累代の家來で、一つは關東管領の被官で謙信が管領職を受繼いだ時から家來になつたものであつて、此二つが水と油の様に何時までも一つにならなくて自然黨派の争ひが起り易かつたとの事である。察する所、伊達家にも斯様な黨派があつたのである。同じ兵部少輔の敵であつても決して中はよくなかつた。例へば奥山大學の味方が書いたものを見れば、大學は實に忠義の者で伊達家の社稷の傾かんとするのを支へた人のやうに見える。又奥山の敵が書いたものを讀めば、大學は我儘な亂暴な男のやうに見える。つまり黨派の争ひで實はどちらにも采配が上げられぬ譯である。しかし兎に角奥山と云ふ男は決して徳を以て人を服すると云ふやうな男でなかつたので敵は益々多くなつた。加之世の中が泰平になるに連れて物入が多くなるのは自然の勢であるから、伊達家の臺所もいよくがたづいて來たので、奥山の反對黨はますます氣焰を高めた。

九 被官 家人、家來と同義、ただし、家人中でも比較的身分の低い者をさす。